

はじめに

コロナで大変な生活を強いられています、皆さんはどの様に自衛手段をしていますか？

私は後期高齢者なので最もリスクの高いレベルになります。感染したらアウトでしょう。そんな覚悟で生活していますが、自粛生活はなかなか難しいです。ストレスが溜まりますが、なんとか年の功で紛らわせています。ただ若者の1年と老年の1年は違います。先があるのと無いのとの差でしょうか。体力、病気、認知力など確実に衰えます。動ける今こそ大事と切実に思います。

朗報としては運転免許証を更新したことです。今回は制度が変わり2回講習と試験それぞれにパスして3回目で免許証を手に入れます。ここまでの時間と手続きは今まで経験したことのない煩雑さでした。高齢者の事故が報道され、バッシングを受けている現状では仕方ないとはいえ役所仕事にうんざりしました。

過去から学ぶ難しさー近衛文麿という人を知っていますかー

まず断っておきますがサブタイトルは、私は知っているという上から目線ではなく、私は知らなかったという意味です。

ではなぜ取り上げるのかというと、きっかけは昨年9月安倍首相が突然辞任した事です。8年弱、史上最長内閣総理大臣を誇った安倍首相の辞任は国民も驚きました。それにつれて在任中の業績について、多くの識者は功罪を含めてマスコミ等で論評しました。

安倍内閣では沢山のスローガンがありました。「アベノミクス」「一億総活躍社会」「日本を取り戻す」「積極的平和主義」「集団的自衛権」「共謀罪」「女性参画・地位向上」「成長戦略」「トリプルダウン」「構造改革」「拉致問題」「北方領土問題」等。

今振りかえってみても馴染みのある言葉が沢山ありました。歴史的な評価は50年後あるいは100年後になりますが、現代の我々も功罪を含めて評価する必要はあると思います。

さて、私に関心を待ったのは論評のなかに「安倍首相は近衛文麿に似ているのでは？」というコメントでした。二人の共通点を考えるために、近衛文麿について調べてみました。

*** 近衛文麿について：1891（明治24年）～1945（昭和20年）****<経歴>**

先祖は中臣鎌足まで遡り平安時代の藤原家直系になり、摂政・関白を独占した5撰家の筆頭であり皇室と深い繋がりのある家系。昭和天皇の信頼が厚かった。弟の近衛秀麿はNHK交響楽団を創設し指揮者としても有名であった。1973（昭和48年）に亡くなっていますから近衛秀麿氏は私もTVなどで知っています。

学歴は、学習院初等、中等科。第一高等学校。東京帝国大学哲学科、京都帝大法科卒業。

政治家歴としては、貴族院議員（25歳～）貴族院副議長（40歳）貴族院議長（42歳）内閣総理大臣（案3次内閣まで）など多数あります。

<思想形成過程や言論活動等>

社会問題への関心「社会主義論の邦訳」、河上肇「貧乏物語」の影響等

- ・弱者救済のための国家社会主義者（個人より国家を優先させエリートが決める）
- ・「英米本位の平和主義を排す」「日本主導のアジア主義の主張」等

近衛文麿は列強国と対等の日本にするため、国論を統一して外交、国防などを進めるために数々の改革案を提案し活発な宣伝活動を行った。貴族院改革案、教育改革案、国政改革案、政党改革案など発表し革新政治家のイメージを高めた。

<内閣総理大臣時代>



近衛文麿 wikipedia より

近衛文麿の主張は陸軍、貴族、政党、右翼にまで影響し支持者を集め、国民大衆にもブームを巻き起こした。第一次近衛内閣時代には、国家総動員法を成立させ、日中戦争への道を突き進んだ。しかし、日中戦争解決に行き詰まりさらに米英等外交関係悪化、独伊との連携に関する陸軍との対立で総辞職した。

第二次・第三次近衛内閣には、日独伊三国同盟、北部仏印進駐、大政翼賛会発足、国民学校制に改革、日ソ中立条約締結、南部仏印進駐、戦陣訓制定（東条英機陸軍大臣が生きて捕虜になるな、死ぬまで戦えと訓示した命令書。玉砕、自決する兵士等の根本原因）、基本国策要綱（日中戦争勝利、新国際秩序形成、国民の意識改革、一致団結と耐乏生活を求める等戦争に備える要綱）など敗戦までつづく戦時体制を完成させた。

その一方で米国とは日本の軍隊を撤退させる代わりに満州国を承認させろとか、日米通商を復活させろとか、三国同盟の参戦条項を適用しない等の条件を含んだ日米諒解案を提出して、懸命に和平の努力を重ねていた。しかし、まったく結果を出せず、政権を投げ出した。

<総辞職の理由>

戦争は泥沼化し解決の目途がまったくたらず、さらに米国の経済制裁を受けて国内経済はひっ迫し、人々の不満が高まった。陸軍は対中強硬派が主流を占めて一切の妥協を許さない体制となり、戦いを有利にするために対米戦争をも辞さずとして戦略を検討し始めていた。

近衛は対米戦争を避けるため大胆な政策転換を決意した。例えば、日本側の要求を変えた対米妥協案を示した。その代わりに米国にも石油禁輸解除とか中国援助の中止など妥協を求めた。日米首脳会談を提唱。これに対して米国はある程度関心を示し進展するようにも思われたが、最終的に拒否され日の目を見なかった。陸海軍は日米首脳会談に猛反発し近衛離れになり、さらに、陸軍と海軍の対立もあり閣内不一致に陥った。

<辞任後>

後継は東条内閣になり1941年12月8日の真珠湾奇襲となった。

終戦後は、東久邇内閣の無任所大臣となり、政治活動を活発化し、新憲法への作業にも従事した。

しかし、新聞社説や国民の近衛批判が激しくなり、米国を含めた外国でも近衛の戦争責任を問われ、1945年（昭和20）12月6日戦犯に指名された。

しかし、12月16日出頭せず55歳で自殺した。「被告になることは屈辱である。所信や、日中戦争等の経緯を裁判で話すことは自分の責任は別として、統帥権の仕組みの問題になり最後は天皇の責任の問題になる。従って裁判を受けることは出来ない」と関係者・知人に述べたといわれていますが、私は、これは自己弁明、責任逃れだと思います。

○近衛文麿と安倍晋三の共通点

- ・国民に圧倒的人気と期待感があった。（安倍氏の8年弱の長期内閣はそのように考えるしか思いつかない）
- ・上流階級出身（貴族と世襲政治家＝父安倍晋太郎外相祖父岸信介首相）
- ・演説が上手で人々をひきつける迫力がある。スローガンが分かりやすい。
- ・時流をつかむ能力は高いので人々にたいして考える暇もなく課題を投げかけ続けた。



第1次近衛内閣 wikipedia より

・ 政権を途中で投げ出した。

○「政権を投げ出した」共通点について

- ・ 近衛氏は対中戦争を陸軍と一緒にあって拡大路線をとる一方で、対米和平交渉を陸軍の反対を受けながら契めたが、結局行き詰まり破綻し、政権を投げ出した。無責任といわれ、敗戦後内外から激しい批判をうけた。
- ・ 安倍氏は病気が理由だが、同様に政権を投げ出している。

安倍氏の実績について、私は余り記憶がありません。敢えて言えば、アベノミクスは、株高・格差・景気持続などが考えられます。

最後に強調したいのは、歴史から学ぶのは記憶を伝える点で大事ですが、さらにアーカイブス（記録）も大事であることです。その点で安倍首相時代は「森友・加計・桜を見る会事件」などで改ざん、紛失、忖度など横行し、都合の悪い記録を作らないなどとても残念です。後世の歴史家などから批判されるのではと思います。

現在の息苦しさーミャンマーのクーデターからー

私の生活は平々凡々の毎日ですが、社会の出来事を見て心痛める事件が続発しています。たとえば、外国だけに限りますと中国・香港・露・トランプ氏の米国・北朝鮮・タイ・中東問題など……。そこにミャンマーの軍事クーデターが突然飛び込んできました。とても驚いています。ミャンマーは、私の父が戦死した国です。今まで戦役者慰霊団として3回も訪問している国なので、特に親しみと思い出のある国です。初めて訪問してからもう13年になりますがこの3回の訪問の間のミャンマーの変化を、拘束されているアウンサンスーチー氏の自宅近辺の印象をもとに書いてみます。



3日、ミャンマー中部マンダレーの通りを走る軍事車両（ロイター＝共同） 2021.2.4 産経新聞Web掲載

・ 第1回訪問《2008（平成20年）3月12～21日》

軍事政権でとても厳しい管理下にありました。本来は2007年に訪問予定でしたが、民主化を求めた激しいデモがあり延期になりました。2008年のスーチー氏自宅近辺は、半径数キロわたり封鎖され近寄ることも出来ませんでした。かろうじてガイドさんから「あの辺にスーチー氏の自宅と日本大使館があります」と教えてくれました。

2010年（スーチー氏自宅解放）2012年（スーチー氏下院議員当選）

・ 第2回訪問《2015年（平成27）2月12～21日》

この年は民生移管が完了していました。軍人の姿もなく行動もかなり緩和されていました。スーチー氏自宅や近くにある日本大使館通りもバスで目の前を通行できました。ガイドさんも誇らしげに楽しく説明してくれました。車内から自宅を撮り、大使館の日の丸を眺めました。

・ 第3回訪問《2019年（令和元）12月13～21日》

2016年スーチー氏が率いるNLD政権が発足し、国家顧問に就任しています。国は驚くほど活気にあふれていました。

1回目訪問と比べてクルマはあふれ渋滞も起きていました。地方も電力事情が改善し、停電もありませんでした。砂利道から舗装道路になり、ヤンゴンは大都会に変貌していました。飛行機は直行便になりました。1回目訪問時はタイで乗り換えて入国し審査も厳しく緑色軍服の軍人に囲まれていたことを思えば隔世の感です。3回訪問時は、人々は自由に楽しく生活していて、民主化を肌で感じました。日本企業も53社から436社（2021

年現在)になり、日本人会も活発に動いていました。最後のフロンティアと呼ばれるにふさわしい状況でした。

スーチー氏の自宅の前でバスを降り門前で写真を撮り、中を覗く事もできました。また、近くの日本大使館を訪問して大使と懇談し、ミャンマー人の日本に対する期待感が大きいことなどを聞きました。

それだけに、今回の軍事クーデターで昔の厳しい軍事政権に戻ることを危惧しています。そして、経済発展と民主化が停滞することなどを恐れています。今後の動向を注視しています。

さいごに

「未来へ希望を」という題で過去、現在、未来の三題話をする予定でしたが、長くなるので今回は止めます。ひとことでいえば「未来の希望は教育から」です。

皆様とお会いできるのを楽しみにしております。